

【要約版】

令和3年度 第2回高島市図書館協議会

開催日時：令和3年12月1日（水）15時30分～17時15分

開催会場：高島市立今津図書館 視聴覚室

出席：國松会長、平松副会長、福原委員、山本（富）委員、山本（恵）委員、井上委員、
桑原委員、桂田委員、山本（永）委員、吉川委員

事務局：柳森館長、志村主監、原田

欠席：梅村委員、田川委員、嶋崎委員

1. 会長あいさつ

10月に緊急事態宣言も解除となり、日々の生活も落ち着いてきた感がある。最近、オミクロン株という新たな型が出てきた。どのくらい広がるかは不明だが、もしも空気感染だとしたら、図書館のような不特定多数が利用する施設は実際のところ対応が難しい。今までは図書館の中からの感染例は国内一例もない。せっかく落ち着いてきていたのに残念。このような状況の中で図書館はどうしていったらいいのかを協議会から図書館に適切なアドバイスをしていければと思っている。

以下、協議事項内容と質疑応答等。（○＝報告内容 ●＝委員意見 ⇒回答）

協議事項1：「令和3年度図書館協議会会議録の承認」について

- 図書館のホームページで協議会の開催日時と協議内容について公開してきたが、今年度からは、会議録も公開していきたいと考えている。（会議録は、委員に今回の会議資料と共に送付済み）
- 良いことだと思うので異議はないが、前回協議会での資料全部を載せるのか？
⇒全部ではなく、会議録を読んで内容がわかる形で資料を上げていく予定をしている。
- ※ 異議なし。12月下旬より、高島市立図書館ホームページ上で公開。

報告事項1：「令和3年9月議会 一般質問答弁」について

- 資料1ページの説明。
- 質問5点目で「電子書籍と紙の本、それぞれの強みを活かす考えについて」と質問が出されているが、それほど電子書籍化は進んでいない。「出版指標年報」にてでている、紙の市場と電子出版の比率について、去年の売り上げ全体が4,000億円。うち

3,420 億円は、コミックが電子化されたもの。書籍自体の電子化は、報道されているほど進んでいない。神戸市の図書館は電子書籍の 5,000 点所蔵しているが、200 万冊の蔵書のうちのそれだけ。圧倒的にコンテンツが少ない。ベストセラーなど本当に利用者が読みたいものは、電子化されていない。その割にお金がかかる現状。やらないと時代遅れになるとかそういったものではないと思う。

* 出典：『出版指標 年報 2021 年度』加藤真由美/編集
公益社団法人 全国出版協会 出版科学研究所

報告事項 2：「令和 3 年度蔵書点検結果等」について

- 資料 8 ページの説明。蔵書点数が 62 万 9844 点。うち不明本 21 点。
- 蔵書点検に半日だけ参加したが、こういう仕事が一番大事だと感じた。
- 21 点は多いのか少ないのか？
- 以前勤めていた図書館に比べても非常に少ないと思う。
- 自分としては、21 点は信じがたい。利用していて「あの本が検索してもない」と気付く本があるので。
- 減ったのはいいが、いまだ貸出もれがあるというのがこれからの改善点だと思う。
- 貸出の時に職員さんが「〇〇冊貸出です。〇〇冊お手元にありますね」と声かけしてくれるのが、お互い確認にもなっていると思う。自分は助かっている。

報告事項 3：「上半期の利用状況」について

- 資料 10～18 ページの説明。
- * 18 ページは、前回、長期間での貸出冊数等を知りたいとの要望があったもの。
- 図書館側の評価コメントに対して疑問がある。9 月の利用減少に対して「図書館も休館していると勘違いされた」とのコメント（8 月から 9 月にかけての緊急事態宣言の発出に伴い、市内では図書館以外の施設が閉館になった。複合施設に入っている地域館は、入り口を同じにしている公民館が休館なので、図書室も休館と思われたのでは。）に関して、それはおかしい。例年 9 月は減っている。今年だけではないのでは？
- 18 ページを見ると、ずーっと減少している。図書館側はこのことを分析しているのか？ 14 ページのマキノと朽木の利用を比較すると、人口規模が全然違うのに大差がない。これは朽木人口 1600 人なのに利用が高い。何か工夫があるのであれば、他の地域も参考にすべきではないのか？

●朽木の利用が高いのは、毎月学校への訪問貸出がされているためではないか？他の地域は、コロナで訪問貸出が再開されていないところもあるので。学校側の姿勢もあると思う。

●地域館の資料購入費は同額だが、住民一人当たりになると朽木は550円、マキノは170円。10年くらい前は、高島市全体で一人当たり200円くらいだった。これは資料の新鮮さにつながるって、朽木の利用が高い原因の一つではないか？

⇒人口割でいくと一人当たりの資料費に差が出るのは確かにそうだが、それが即、高い利用につながるのかは、わからないので引き続き分析していきたい。

●今、滋賀県の資料購入費が平均一人当たり200数十円。高島市はちょっと少なくなってしまっている。前は300円くらいだったと記憶している。もともと2200万円だったので、1500万円くらいまで戻せると今津や安曇川規模の図書館にも、新しい本が入ったなど利用者にも実感してもらえる。影響がボディブローのように効いてくる。利用減少は、そのあたりが関係してきていると思う。

●コロナで、小学校の課外授業や遠足が遠出できなくなり、今年は地域の図書館へ遠足の代わりに出かけて行った。実際に本の説明や図書館、本の利用について司書さんから子どもたちに話をしてもらった。電子書籍やWebとかで見学するより、子どもたちはよくわかったのではないかと思う。また地域の図書館へ行こうと選択された先生の考えも良かった。やはり学校の姿勢というか先生との連携は今後必要になってくると思う。

●こども園や小中学校に配られている図書館だよりの紹介スタイルが今回は違ったので、子どもたちに本を読んでもらえるよう色々と工夫がされていると感じた。

●正直な話、地域館は古い本が多すぎる。開架室に置いておいても利用されない。辞書類の古いのも同じ。古い本を引っ込めないと新しく入った本が棚に入ると目立たなくなる。(棚の鮮度)限られた資料費でうまく開架室を見せる工夫に今後取り組んでみられては？

その他

●高島公民館の中にある図書室に地域住民の方にちょっと足を運んでいただければと、高島公民館が発行している「公民館だより」の中で、図書室や本のことを紹介してもらえないかと掛け合っている。

※2022年1月号、2月号に高島図書室の紹介が掲載されている。